

大シンポジウム「世界史教育のなかのアメリカ史」報告要旨

【司会】 中野博文（北九州市立大学）

【報告】

岡本智周（筑波大学）「歴史教育の社会化機能について—日米の歴史教科書に通底するもの—」

鳥越泰彦（麻布高等学校）「アメリカの世界史教育・歴史教育—日本の世界史教育・歴史教育との比較から—」

油井大三郎（東京女子大学）「アメリカ史の研究と教育—高校と大学をどう架橋するか—」

【コメント】 貴堂嘉之（一橋大学）

本シンポジウムは、アメリカ史研究者が歴史教育といかに向かいあっていくのかをテーマに開催された。シンポジウムの冒頭、企画を担当した松原宏之氏が趣旨説明を行い、今日の日本においては、2006年に発覚した高等学校での世界史未履修問題に象徴されているとおり、歴史教育の空洞化が問題になっていると述べた。受験のための暗記が学習の中心となっていること、世界と自己との関係を史的に考える歴史学的思考を高校の世界史教育で育成することが困難なことを前にして、アメリカ史研究者の学術団体である本学会が何をなすことができるか、何をなすべきかをこのシンポジウムで考えたいと氏は説明した。

第一報告者の岡本智周氏は、20世紀末からの米国での歴史教育改革の動向を三つ紹介した。教育の質の確保を求める政府の圧力と受験対策に力を入れざるをえない中等教育の事情、世界史教育の内実は何を求めるかをめぐる政治集団と研究者・教育者の関係、黒人史を例にとつての生徒の知的関心を刺激しない授業の事例である。氏はこうした状況の背後にあるものとして、学校歴史教育を規定するナショナル・フレームの強固さを問題にし、それを教育社会学の立場から図式化して分析した。学校教育の機能が近代社会への生徒の統合にあるとすれば、そうした学校の社会的機能が条件付ける枠組みを超える内容を教えることは難しい。そこで氏は自由な歴史的思考法を培う方法として、学校教育の内容が国民史としてなされていることを明示し、国民国家を中心とした語りとは違う歴史があることを生徒に自覚的に考えさせる道があると論じた。

第二報告者の鳥越泰彦氏は日米の中等歴史教育の比較を行った。連邦国家アメリカでは1980年代から学校教育に関する全国基準の策定が進んだものの、世界史をどの学年で学ぶか、必修科目として立てるかどうかは州によって異なる。教育手法でも米国では、能動的で責任感ある市民の養成が教育目標として掲げられているため、歴史的事件の背景分析やインターネットを利用した事実関係の調査、レポート作成など、さまざまな課題が生徒に与えられる。鳥越氏はこうした状況を日本の中等教育の現場と比較し、近年米国でも受験を目指した学習が重視されるようになったものの、社会科教育の一つとして生徒の市民

としての技能や行動を涵養しようとする米国は、歴史教育の一つとして歴史理解を重視する日本と教育姿勢に質的な差異があることを明らかにした。

第三報告者の油井大三郎氏は、大学進学率が上昇しエリート養成のみが大学の機能ではなくなった今日の日本で、中等教育・高等教育の双方で良き市民の育成を目指した社会科教育の理念が再評価されるようになっている事を論じた。油井氏は米国において社会科教育が生まれた背景と、社会科教育と歴史教育の錯綜した関係、米国占領下の日本における社会科教育の導入と独立達成後に起こった科目構成の見直しを史的にたどり、日本には課題の発見解決を重視する社会科教育に文化的な抵抗が強いものの、20世紀後半には経済のグローバル化に直面し、従来型の教育の修正を迫られていることを示した。

三報告を受けてコメンテーターの貴堂嘉之氏は歴史教育論議が近年高まりをみせるなかで、アメリカ史研究者の発言が少ないことを指摘し、この背景には高校世界史教科書におけるアメリカ史記述が相対的に少ないことが関係しているのではないかと主張した。そして、岡本報告と鳥越報告との間にある提言の相違、油井報告が求める教育改善の方向について質した。フロアからは、今後の日本における世界史教育のあるべき姿について質問が寄せられたほか、長沼秀世氏は高校教科書や大学入試の質の向上を目指してアメリカ史研究者は積極的に歴史教育者としての責務を果たすべきであると訴えた。

本シンポジウムは質疑の時間が短かったものの、アメリカ史研究者の教育者としての社会的役割を正面から討議した点で、長く記憶されるものになったと思う。FD活動が大学教育で義務化され、教育内容への自己点検が厳しく求められるようになった現在、研究教育に職業として携わる人々がアメリカ史教育の在り方について問い直す機会は、学会としてより組織的につくられていくべきものであろう。

(中野博文)